

# OUA写真研究会会報

*Dazzling Green* No.9

2022年6月12日発行



© Naoya Yoshikawa

# ご 挨拶

北川英雄

皆様お元気でお過ごしでしょうか？

コロナの発生患者数はまだまだ減少しきれておりませんが、重症患者数がかなり減り各自の注意と対策により防止が出来る所まで来ました。これからは撮影活動その他が活発化され、皆さんの活動範囲も広がる事でしょう。

第2回 OUA 写真研究会展も3月から9月に変更となり心配しておりましたが、やっと安心して展示会が行えるようになります。撮影も思った様に行けず、イメージだけがどんどん膨らみ、早く本番をと待っておりました。そのイメージの中で写真の表現方法を考えますと、一般的な印画紙へのプリント、版画によるプリント、サーフボードなどへのプリント、などなど自分の撮影したものに合った出力が考えられます。表現したいものにプリントをして見る、いろんな手法で表現が出来るのが楽しみになり、わくわくしてきます。

これからも考えをまとめ、実施に移せればと考えます。



湧 雲

鳥取県 大 山

撮影 北川英雄

## 会 員 作 品



松本好子（2枚共通）

タイトル：escape

キャプション：私の好きな雨の日 イメージ通りに写った一コマです。

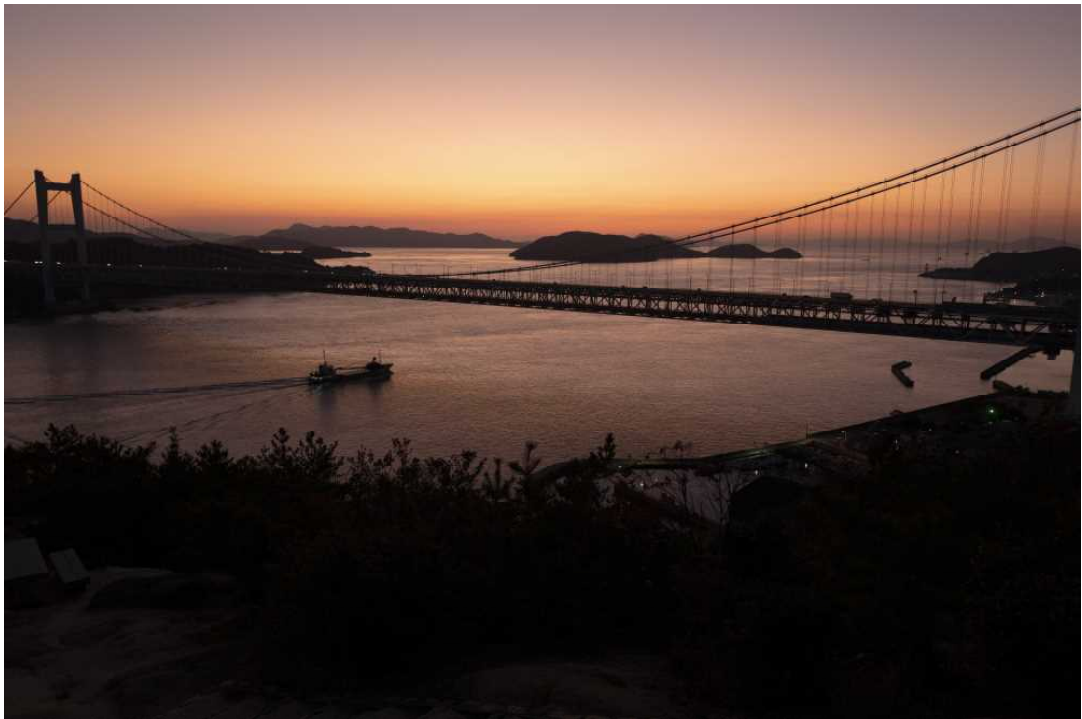




吉田 真

タイトル：瀬戸内海

キャプション：海に突き出た崖にたつ、阿伏兎観音堂。海の安全を祈願している。  
一度船に乗って海から見てみたい。



吉田 真

タイトル：瀬戸内海

キャプション：瀬戸大橋が出来て、島が連なるだけの単調な景色に変化が生まれた。自動車や電車、船舶が行き交う

## 第 2 回 対 談

対 談：若林久未来（OUA 写真研究会会員）

対談日時：2022年4月30日（土）

10：00～11：20

場 所：堺アルフォンス・ミュシャ館（堺市立文化会館）

参 加 者：若林・津田・山中・北川英（4名）

テーマ：「 私の作品作りへの取り組み方 」

北 川：若林さん、本日は当美術館での展示の最中に、忙しいところ時間を頂きまして有り難うございます。

今日は若林さんの写真に対する取り組み方や考え方についてお話をお伺いできればと思います。まずは、若林さんの写真考についてお伺いしたいと思います。

若 林：私は、全くの素人で芸大の写真学科に入学し、写真というものがよくわかっていませんでした。私の場合、一般的な写真の様に、視覚的に識別できる画像の記録ではなく、“心の中で考える目に見えない” “心の中の小宇宙” を表現したいと考えています。

津 田：眼に写ったものの記録ではなく、身体全体で感じたものの表現ですね？

北 川：ヴァンダイク表現は密着プリントですが、始めは35 mm でスタートされたのですか？いつ頃から大判撮影になられたのですか？

若 林：私の制作方法のヴァンダイクブラウンプリントは、基本は大判を使いフィルムの密着で作っていくものなのですが、今回のミュシャミュージアム展示の作品は35 mm で撮っています。

古典プリントの分野は、薬品の調合、温度、湿度、液温、道具等、とにかく手間と時間がかかります。ガラス湿板は木製大判カメラを改造しないと出来ない、廃れていったのもうなずけます。私は大阪芸大で初めて古典プリントを知りこんな写真があったのかと感動しました、そしてもっと簡単に出来る方法は？と考えて、ここまで進化し続けています。

当初は8×10などの大判を使っていたのですが、今はもっと簡単にと研究しています。ワークショップをする時も誰でも簡単に出来るようにと、ネガデータ（スマートフォンでも可能）を使っています。単に写って良かったではなく、どの様なプロセスにすれば楽しく続けられることが出来るかという事を考え、古典写真の良さを伝えています。

津 田：4×5、8×10では仕上がり迄のプロセスは長く、そのプロセスの時間や余韻を楽しんでいるのですね？

若 林：4×5、5×7、8×10を使うのは、ガラス湿版を使う時。ヴァンダイクブラウンでの写真は35 mm で撮影をし、ネガを作り加工する。それにはPCでネガはいくらでも大きく出来るのですが、印画紙になる部分は刷毛で薬剤を塗るので、大きさに限度があります。印画紙を作るのに、紙が大きすぎると刷毛で薬剤を塗るときにムラがでます。大きくてもA3ネガ迄にする。A2～A1の印画紙を

作るとき（今回のミュシャのプリントの様な）、2 cm 位の枠（余白）を除くと  
印画面は A 3 が限界ですね。原本は A 4 を作り、額装は A 3 サイズにするので  
す。

北 川：ミュシャの作品をヴァンダイクで仕上げるのは、一番マッチしていると思います。

若 林：私もアルフォンス・ミュシャの作品が大好きでヴァンダイクで仕上げるお話を頂  
いたのが嬉しかった。今回の作品は、ミュシャミュージアムから、原板のデータ  
を頂いて、自分なりに作品を解釈してここまでの作品に持ってきました。

北 川：これを仕上げるのに一番難しかったのはどこですか？

若 林：世界中の人が知っている作品なので、それを自分なりにイメージを壊さずに制作  
するのが一番難しかった。その為にいろんなパターンを作ったのですが、結果こ  
の形になったのです。

北 川：ヴァンダイクでこの色に仕上げたのはどうしてですか？

若 林：ヴァンダイクは、単にプリント（密着焼き）すると、どうしても立体感が出ない、  
これが課題でした。元々ヴァンダイクは茶色がメインですので、そこに色を追加  
していったら立体感がでるのではないかと加工は、35 mm で撮影したデータを  
フォトショップでネガにする。それをヴァンダイクに仕上げる。特にカラーは、  
その原本をフォトショップに入れ加工する。その繰り返しで作品を作っていきます。

北 川：ミュシャの複写のみでなく、スナップや風景などをスマホや35 mm で撮り、同  
じようにネガを作っていきますか？

若 林：もちろんスナップや風景写真、スマートフォンからでも作れます。古典写真を知  
ってもらい古典プリントで何をどうしたいのかを考え、PC で活用する方法を考  
える。私はこの古典写真を「classical photograph®」と名前を付け、商標登録をし  
ています。古典プリントと言う名前は昔からあり、広く知られていますから、現  
代の技術のデジタル加工等をしてやり易くし classical photograph® として広めてい  
きたい。

フランス、海外等で展示をした時にも感じたのですが、美術館等で展示をするに  
は天井が高く、広い所では作品を大きくしないと、見栄えや迫力に影響がでます。  
大きな作品を作るには、この加工の仕方がなくてはならないのです。

北 川：若林さんは、ヴァンダイク、サイアノ、鶏卵、ガラス湿板等古典プリントしかし  
ないのですか？

若 林：私は、古典プリントありきでやっています。他の制作方法にはあまり興味があり  
ません。それとこのヴァンダイクのセピア色が一番興味を持ったので続けていま  
す。

北 川：古典プリントは、4×5、8×10の密着でやるのが基本ですが、機材を持って  
いくのが大変ですね。

若 林：いろんな事が私には出来ません。一番初めに芸大で受けた古典プリントの授業が  
興味深く感動しました。今後は、この古典技法を現代にマッチした古典プリント  
に進化させてやっていきたい。

津 田：里先生に教わったのが初めてですか？

若 林：そうです。里先生に教わった古典プリントを始めたのが、確か2009年頃です。

2011年に卒業してから、いろんな紙を試しました、紙によって、ロットによって色が変わるので、いろいろ試してみました。時には水質により色が変わってきます。色がでない時もありました。

北川：いつもどこでこの作業をされてるのですか？

若林：作業は自宅でやっています。A3迄のネガプリントは自宅のプリンターでしています。特に美術館で展示する様な時のA1サイズ等は外注でやってもらっています。現在、インド総領事館より「関西におけるインド人。インドからの移民の人々の写真を撮ってほしい」と依頼があり制作中です。写真にはストーリーが必要です。まず取材をしインド人の心を考え、インド人に向かい合ってプリントを仕上げていっています。

北川：ごく一般的に仕上げるのは誰でもやれるから、ヴァンダイク等古典技法での仕上げは若林さんにしか出来ないのでは、若林さんは良いところに目を付けられましたね。

若林：コロナ禍で家にこもっていた時にワークショップなどで子供達にも手作りの良さを知ってもらいました。ヴァンダイクは銀を使うので大人の生徒さんに、子供達には銀を使わないサイアナタイプでカメラも使わないフォトグラムを教えています。

北川：手作りというのを見直す事ができる様になったんですね。一から手作りで、どうやって作っていくかを考えながらやっていくのが楽しいですよ。

若林：この頃は手軽に食べ物やおもしろいもの等、感じたものをスマートフォン、小型カメラで撮ります、しかしそれを見直す事もなく、削除するのが当たり前になっています。ただ撮って終わるだけでなく、一枚でも良いから、一から自分で作った写真は、大事にするし、思い出にも残る、そういう気持ちを大切にしたいのです。

北川：写真は最後の仕上げや使い方を考えて撮っていくので、それが良いのではないかと思います。若林さんにとっては、ヴァンダイクと出会えたのが良かったと思いますよ。

津田：単に撮っているだけでなく、作品に仕上げるという考えで撮っていくので、良いと思います。

若林：この古典プリント（classical photograph®）の普及と伝承をしていきたい。それをするにはどうしたらいいのか？いろんな所で展示をし、知らない方に見てもらい、体験して知ってもらい、認識してもらおう。

北川：作品を作りたいと思うのは、皆同じだと思います。しかし、今の若林さんは自分の考え、心の中を表現に入れているからいいんですね。これからもこの古典技法の作品を作り続け、広めていってください。

若林：私の考えは

- ①作った作品は必ず発表する。発表して皆さんからのご意見をお聞きし、自分の足りないところを補う。
- ②芸術は製作費用・展示費用等がかかるので、補助金応募等にチャレンジをし発表の機会を設ける。
- ③古典技法の普及と伝承が私の使命のように思える。

北 川：今日は為になる話を聞かせて頂き、有り難うございました。

今後のワークショップは2022年6月11日、7月16日、7月18日の3回で、  
各日 1回目：10:30~12:00、2回目：13:00~14:30、3回目：15:00~16:30  
の一日3回で、各回6人までで受け付けます。

場 所：堺アルフォンス・ミュシャ館（堺市立文化会館）

展 示：4月9日から7月31日まで

## 第2回 OUA 写真研究会写真展 日 程

写真展まで後4ヶ月となってきました。準備は進んでいますでしょうか？

案内ハガキと図録等を7月15日頃には仕上げて下記の日程で発送する予定です。

①8月初旬・・・メーカー、ギャラリーさんに依頼発送

②8月中旬・・・出展者への発送（図録・ハガキ）

これを実施するためには、6月25日頃原稿仕上げ、7月1日頃に印刷発注が必要です。

その他、

③ポスター等仕上り済み（会場案内用）

④全展示作品の名札・題名・キャプション の作成を8月末には仕上げる予定です。

皆さんの出展全作品の枚数・題名・キャプションを順次作成していきますので、  
8月15日までに谷岡信弘又は北川英雄までPCメールにて送信してください。

皆さんにお渡しする図録・ハガキは、図録2枚・ハガキ10枚を予定しています。

枚数が足りない方は、6月25日迄に谷岡信弘又は北川英雄までPCメールにて送信してください。

---

表 紙 写 真：吉川直哉

タ イ ト ル：シリーズ「Family Album」より

キャプション：この作品はシリーズ「Family Album」からです。このシリーズは自分の「家族アルバム」を材料に一部を複写や加工して再構築したものです。この一枚は十歳頃の私と母の記念写真で、それを複写したものを手にして、撮影された奈良の若草山で風景とともに撮影しています。

現在の風景は若干変わりましたが、半世紀ほど経て二つの時間を重ね合わせた作品を通して、写真というメディアが持つ記録性と私たちの記憶について考えたいと思います。

「S家の庭」吉川直哉写真展が近鉄南大阪線、高田市駅から徒歩5分の"ガルリ カフェ アレ"で6月3日から28日迄行われております。水・木 6月5日、19日日曜日休み。

編集後記：対談を始めて2回目ですが、話す方も聞く方も結構神経を使いますね。対談は良い勉強になります。参加希望者（聞き手）は事務局まで連絡下さい。

ガルリカフェの電話：0745-25-1002です。

編集責任者 北川英雄

---

OUA写真研究会連絡先：事務局 谷岡信弘 [bbad@festa.ocn.ne.jp](mailto:bbad@festa.ocn.ne.jp)

代表幹事 北川英雄 [kitagawa@shinko-technos.co.jp](mailto:kitagawa@shinko-technos.co.jp)